和歌の基礎(きそ)知識

和歌は五音と七音を基調としており、代表的な形式に短歌と長歌がある。

・**短歌**…五・七・五・七・七の三十一音の歌。

・**長歌**…五・七を三回以上繰(く)り返し、最後を多くは七・七で結ぶ歌。
　長歌の後には**反歌**(はんか)とよばれる歌が添(そ)えられ、長歌の意味を要約したり補足したりする。

音数が五音・七音の定型となっていないものもあり、音数が定型より多いものを**字余り**、定型より少ないものを**字足らず**という。

●句切れ

一首の中の意味上の切れ目を句切れという。短歌の句切れには、**初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れ・句切れなし**、などがある。

（例）五(初句)・七(二句)／五(三句)・七(四句)・七(結句)　…二句切れ

句切れの位置によって、歌のリズムは異なる。

・五七調…二句切れ・四句切れ。万葉調。

・七五調…初句切れ・三句切れ。古今(こきん)調・新古今調。

古今和歌集　仮名序

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言(こと)の葉とぞなれりける。
やまと歌（和歌）は、人の心を種として、さまざまな言の葉（言葉）となったものである。

世の中にある人、ことわざ繁(しげ)きものなれば、
この世の中に生きる人々は、関わりのある出来事が多いものだから、

心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出(いだ)せるなり。
託して、言い表すのである。

花に鳴く鶯(うぐひす)、水にすむ蛙(かはづ)の声を聞けば、
※河鹿

生きとし生けるもの、いづれか歌を詠(よ)まざりける。
どれが歌を詠まないということがあろうか。

力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、

目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれと思はせ、
精霊たちをもしみじみと感じさせ、

男女(をとこをんな)の仲をも和(やは)らげ、
親しくさせ、

猛(たけ)き武士(もののふ)の心をも慰(なぐさ)むるは、歌なり。
勇猛な　なごませるのは、

※河鹿…カジカガエル。清流に生息し、夏から秋にかけて澄んだ声で鳴く。

確認テスト

(1) 次の歌には、五音・七音の定型となっていない箇所がある。その箇所が、字余りならア、字足らずならイで答えなさい。

風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな
西行法師（新古今和歌集・雑歌中）

風になびく富士の煙が空にゆくえも知らず消えるように、行き先もわからない私の思いであるよ。

〔　〕

(2) 次の三首は句切れが共通している。共通する句切れを、漢字で答えなさい。

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ
寂蓮法師（新古今和歌集・秋歌上）

さびしさはその色のせいだというのでもない。真木（杉やひのき）が茂る山の秋の夕暮れよ。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ
西行法師（新古今和歌集・秋歌上）

ものの趣を感じることのないこの身にも、しみじみとした趣が感じられることだ。鴫が飛び立つ沢の秋の夕暮れよ。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ
藤原定家（新古今和歌集・秋歌上）

見渡すと、花も紅葉もないことだ。海辺の苫屋の辺りの秋の夕暮れよ。

□ 句切れ

(3) 古今和歌集の「仮名序」を書いたとされる人物を答えなさい。

〔　〕

(4) 次の文の解答欄に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

古今和歌集の「仮名序」では、和歌というものは、人の心を□として、そこから生え育った□のようなものであると述べられている。

(5) ――線部「いづれか歌を詠まざりける」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア いつか歌を詠むことだろう
イ いつしか歌を詠まなくなった
ウ どれもみな歌を詠むのだ
エ どれも歌を詠むことはない
オ どれでも歌に詠むことができる

〔　〕